

医療タイムス

週刊医療界レポート

2011.5/23 No.2012

特集

精神医療の明日

病院に求められる意識改革と役割



タイムスインタビュー

命を守ることがライフワーク
真面目に働く者が報われる社会に

参議院議員
民主党自殺対策推進プロジェクトチーム座長

柳澤光美氏

グラフ北から南から No.245

社会医療法人財団大和会

東大和病院

(東京都東大和市)

冬の時代の診療所経営

震災49日。亜急性期の被災地より



医療法人社団裕和会理事長
長尾クリニック院長 **長尾 和宏**

1958年香川県生まれ。東京医科大学卒業。尼崎市医師会地域医療連携・勤務医委員会委員長。尼崎市医師会内科医会前会長。医学博士。著書「町医者力」「パンドラの箱を開けよう」(エピック)「在宅療養を支えるすべての人へ」(共著、健康と良い友だち社)など

HP <http://www.nagaoclinic.or.jp>

ブログ <http://www.nagaoclinic.or.jp/doctorblog/nagao/>

開業医は被災地に飛んで行きたくても簡単には行けません。そんなジレンマの中、4月28日(震災からちょうど49日目)から8日間、男4人で被災地を巡りました。今回は、経営と関係ありませんが少しその報告を。

花巻空港で車を調達し、あらかじめ送っていた救援物資を搭載。岩手、宮城、福島と転々と南下しながら、日が当たっていない避難所などを回りました。聴診器片手に、水や枕やお薬を差し入れしながら、約1000キロを移動。急性期から慢性期へ移行する、まさに亜急性期の東北に一体何が起きているのか。自ら視診、触診、そして診断、治療方針も提言できればと試みしました。

岩手県釜石市の大きな貨物船が乗ってしまった家のご家族の言葉。「人間は欲深い。家が残ってしまったばかりに余計な作業を続けている。いっそ流されたほうがよかった」と。宮城県気仙沼市では、湾の真近に建ちながら奇跡的に残ったホテル望洋に宿泊。最初は避難所でしたが、私が行ったときはボランティア学生らが運営。再開されたばかりのフェリーで大島に渡り、島でただ1軒の診療所のお手伝いや訪問看護師さんの訪問にも同行。仙台市荒浜の光景に絶望しながら、名取市の閑上小学校ではがれきの中から自衛隊員が取りだした写真をきれいに洗い持ち主に届けるボランティア「思い出探し隊」の皆さまの活動に感動。福島県三春町では、小説家で復興構想会議の委員も務める玄侑 宋久さんと対談し、鎮魂のお経まで唱えて頂きました。福島県相馬市では、医師でもある立谷秀清市長の震災対応を見聞し、本物のリーダーシップを学びました。道中、多くの病院や診療所を訪ね、被災者、ボランティア、医療者と話しました。津波は終わりましたが、原発事故はまだ終わっていません。福島の混乱はむしろ拍車がかかっています。相当なストレスで問題山積で

す。現在、従来の仮設住宅ではなく、長屋式の共同住宅について勉強しています。すでに立谷市長が12人型の井戸端長屋を設計されています。医療・介護以前に、まず住宅、生活であることを体感して帰りました。

さて、相馬市では震災孤児が44人も出ました。まだお腹の中にいる子どもも含めると45人。「彼らが18歳になるまで毎月3万円を支給する」という条例が早々に成立しました。試算では約2億円の費用が必要ですが、まだ4分の1しか集まっていません。今回、この記事を読まれた皆さまに是非ともご支援をお願いいたします。なぜ相馬なのか？ 実は孤児の支援条例が制定されたのは現在のところ相馬市だけです。もし相馬プロジェクトが成功すれば他の自治体にも広がるはず。孤児の支援は、基礎自治体がきめ細かく行えばいいと思います。支援金は、市長が交代しても存続し、100%子どもたちに届きます。このような条例がないと、支援金は確実に実行されません。災害孤児救済モデルをわれわれ医療関係者も支援しましょう！ すでに世界中から志が集まりつつあります。ベルギー在住の知人にも呼びかけて街頭でたくさんの募金を集めて頂きました。私自身もこれから街頭に立ちたいと思います。

相馬市震災孤児等支援金支給基金の振り込み先は、東邦銀行 相馬支店 普通口座 1033249「震災孤児等支援金」。詳細は相馬市役所のホームページを参照してください。